

本人の復職への意欲を尊重して裏方に徹し 「そっと支える、ずっと支える」

第一電機工業株式会社

石川県金沢市に本社のある第一電機工業株式会社は、建設関連の総合設備会社として多彩な事業部門を擁し、その独自の総合力を駆使して、地域社会の発展に貢献してきた。例えば、「世界で最も美しい駅14選」*1に国内で唯一選ばれた金沢駅の象徴ともいべき兼六園口（鼓門*2）など、地元ランドマークとなる数々の建築物の電気設備工事に携わっている。

そんな同社では、早くから社員の安全と健康対策に力を入れてきたが、2018年からは治療と仕事の両立支援への取組も開始し、2020年から2年続けて健康経営優良法人にも認定されている。

そこで今回は、同社の治療と仕事の両立支援体制と健康への取組について、宮永守上席執行役員・総務部長と、総務部総務課の宮口好美さんにお話を伺った。

1. まずは支援の枠組みを確立 細部は試行錯誤しながら整える

同社で両立支援の取組が始まったきっかけは、2018年に40代の社員が膠原病で入院したことからだ。入院は延べ約11カ月の長期にわたったが、その間、上司や同僚スタッフに本人からメールで病状や検査結果に関する報告が絶えず送られてきたという。「例えば、『今日病院に行ってきました、検査結果はこうでした』と送られてくるのですが、そのなかで本人から復職したいという話が所属長にありました。そこから労務担当の宮口に報告があり、『では会社としてどうやって復職をサポートしていけばいいのか』という検討が始まりました」と宮永部長は振り返る。

まったく前例がないなかでのルールづくりのため、まずは総務部長、衛生管理者、総務課担当者、工事部門長、

直属上司の5名による「支援チーム」を立ち上げ、その後役員にも1名参加してもらい、検討を開始した。このとき、完成形はつくりず、ある程度形ができた段階で役員会に諮って了承を得るようにした。枠組みだけは整えて、細部は試行錯誤しながら支援の体制をつくり上げていくというアプローチだ。その際、心強かったのは石川産業保健総合支援センターの存在だったという。

「最初は右も左もわからない状態で、厚生労働省のガイドラインとマニュアルを持参して同センターの担当者の方に相談しました。その後、なんとか当社の形にマニュアルをつくり変え、社員へ向けたリーフレットも同時に作成し、それを持参して『これでどうですか?』と確認の相談をしました。その際に丁寧にわかりやすく教えていただいて、本当に心強かったです」と宮口さんは語る。

一方、法律的なことは宮永部長が社会保険労務士に相談し、添削やアドバイスを受けるなど、いわば二人三脚で体制づくりを行ってきた。

その結果、まず実行したのは「試し出勤」で、最初は週2～3日、1日3～6時間を1カ月間行い、様子を見た。その後本人からの申し出を受け、正式な復職に向けて産業医とも面談し、1カ月ごとの復職プランを立て、週3日、1日6時間の在宅時短勤務という形で復職を果たす。在宅でも勤務できるスキルがあったため、その約半年後には在宅でのフルタイム勤務に移行し、現在も元気に、治療と仕事を両立しながら勤務しているという。

2. 当事者の気持ちに寄り添う 両立支援コーディネーターに期待

治療と仕事の両立には、まず本人の話をしっかり聞く

ことと、要望を受け止めることが大事だと宮永部長は強調する。「会社でルールは決めましたが、それを一方的に押しつけるのではなく、要望をじっくり聞いて寄り添うという姿勢でないと、本人の気持ちを引き出せないと感じています」。

こうした思いもあり、宮永部長は自身が両立支援コーディネーター^{※3}基礎研修を受講し、同社初の両立支援コーディネーターとなる。

もともと工事の現場が長かったという宮永部長は、職人を管理する立場だったこともあり、相手の話をじっくり聞くのは得意だ。しかし現在の立場は部長ということもあり、社歴の浅い社員からは要望をいい出しにくいかもしれないと考え、現在は次の世代の両立支援コーディネーターの養成に力を注いでいるという。

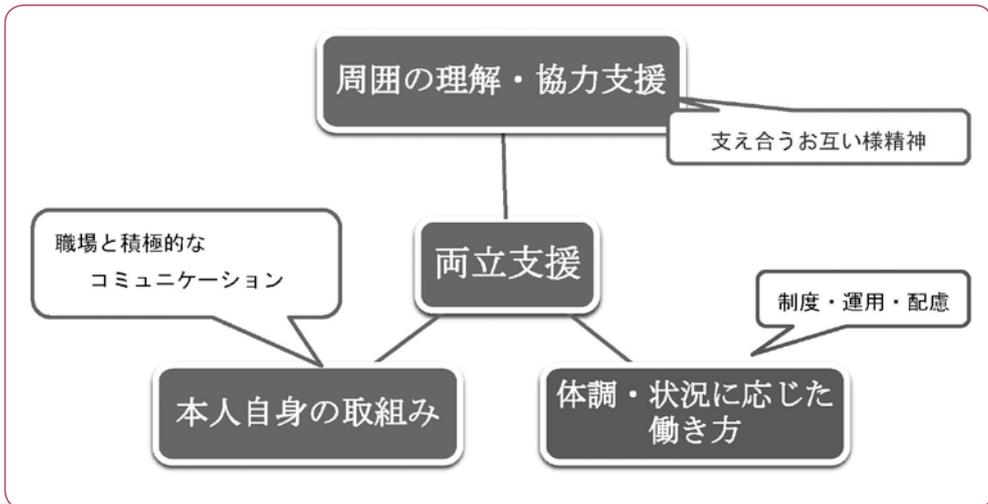
実は宮口さんも両立支援コーディネーター基礎研修の受講を望んでいたのだが、ちょうど産休と重なって実現は叶わなかった。一方で、両立支援のきっかけとなった社員は、宮永部長が受講したことをきっかけに興味を持ち、在宅での受講を選択して両立支援コーディネーターとなった。

「今年に入ってからたくさんの方が申し込まれるので、受講が非常に難しくなっています。現在、1名が受講完了し、続けてもう1名も受講中です。なんとかあと2名ぐらいは受講して、将来的にはコーディネーター5人体制をつくり、コーディネーター同士でケーススタディが行えるまでにしたいですね」と宮永部長は期待している。

3. 支援のケースは千差万別 早期発見と健康管理が重要

前述のケース以外では、現在メンタルヘルスの不調に陥った社員がおり、その社員の復職希望に対して、産業医と連携しながら両立支援プランを策定・運用中だという。「まずは通院がしやすいように、勤務時間を短縮することから始めます。また、毎日服薬・投薬しているので、状況を聞きながら無理はさせず、体調が悪ければ

両立支援体制のイメージ



出典：第一電機工業株式会社資料

早退を促すといったところから、徐々にハードルを上げていくようにしています」と宮永部長。

その社員は現場の担当であるため、在宅勤務は難しい。しかし、担当という立場から一度サブ的な立場に移して負荷を軽減し、徐々に体調を戻してもらうプランを描いている。「この2例だけを見ても分かる通り、両立支援には同じケースというのはありません。人も職場もすべて条件が違います。常にさまざまな問題が発生するので、一つずつ解決していくしかないと思っています」と宮永部長。

また、両立支援以前に社員の健康管理こそがもっとも重要だという。健診での早期発見と二次検査の徹底、そして必要な場合はすぐに治療し、なるべく症状が軽いうちに治す。こうして両立支援が必要になる前に回復していることが理想だからだ。

「当社の企業CMに『そっと支える、ずっと支える』という言葉があります。私達は裏方に徹して、社員に対して常にこの思いで寄り添っていきたいですね」と、宮永部長は熱い思いを語っていた。

※1 アメリカの旅行雑誌「トラベル&レジャー」のWeb版記事(2011年)より。
 ※2 金沢駅の兼六園口にある、ねじって組み合わされた柱が特徴の門。能楽の鼓をイメージしている。
 ※3 治療と仕事の両立に向けて、支援対象者、主治医、会社・産業医などのコミュニケーションが円滑に行われるよう支援する者のこと。

会社概要

第一電機工業株式会社
 事業内容：屋内外一般電気設備工事など
 設立：1953年
 従業員：199名
 所在地：石川県金沢市